「次世代を担う生徒と後進育成のために～教科等指導員・研究主任として～」

伊 丹 市 立 西 中 学 校
主幹教諭　野田　義子

1　取組の内容・方法

(1)　研究主任として

①　授業研究や研修会を通して

ここ最近の教育界ではベテラン教員の大量退職、それに伴う若手教員の大量採用により、本校でも 30 代以下の教員の締める割合が７割近くに上る。

一方、保護者の学校に寄せる学力向上への期待の大きさは、学校評価からも伺い知ることができる。生徒の学力向上のためには、教員一人一人の授業力向上抜きには考えられない。研究主任として、このように自校の課題解決と学習指導要領のねらいを鑑み、毎年研究テーマの設定を心掛け、研究推進委員会のメンバーはもとより、全教員で共通理解を図りながら研究を推進してきた。

本年度は、研究テーマを「自ら学び、自ら表現できる生徒の育成」、副題を「思考を深め、生き生きと活動する生徒の育成」とした。その具現化のため、年２回の校内研究会における研究授業と全教員による年１回の公開授業を設定した。研究授業の授業者は 20 代の若手教員や 30 代のミドル世代の教員から人選し、全教員で一つの授業を参観することで公開授業における課題を共有するようにした。授業後は、毎回、大学から講師を招聘し、次期学習指導要領実施を見据えた講話や本校の課題解決のための講話を拝聴することで自身の授業改善に生かすことができている。

また、若手教員育成のために、定期的に OJT 研修を実施している。授業力向上に繋げる教科研修はもとより、若手教員が日々直面する様々な課題をタイムリーに取り上げ、解決への糸口を共に探ったり、先輩教員からの経験談を聞いたりすることでチーム意識の醸成を図っている。

②　子供たちに「育成すべき力」を付ける取組を通して

学習指導要領の改訂ごとに、その理念に基づき、子供たちに育成すべき力が示される。９教科の授業はもとより、「総合的な学習の時間」等を通して、変化の激しい世の中で生き抜くための逞しさが身に付くような研究テーマを設定している。

前任校で研究主任として取り組んだ際には、「総合的な学習の時間」に自己と向き合い、自己を見付けることを大テーマとし、病院、消費者センターをはじめ、多方面の関係機関と連携しながら、「自分史の作成」や「命」「日常生活に潜む危険や課題」に目を向けた取組を計画した。生徒に調べたことを発表させるには、まず教員のプレゼンテーション力向上を図ることに着眼して、研修を重ねた。

また、現任校では、生徒の「表現力の育成」を目指し、３年間で発達段階に応じたテーマを設定し、１分間スピーチを行っている。クラス内発表から学年発表へと広げ、平成 27 年度の伊丹市の研究発表会では、継続した取組の成果として、生徒によるスピーチを来校頂いた方々に披露した。

(2)　教科等指導員として

平成 22 年度から４年間、伊丹市教科等指導員（中学校美術科）として、また、平成 26 年度からは兵庫県教科等指導員としての機会をいただき、初任者研修や中堅教諭等資質向上研修会において後進の育成に携わっている。美術科という教科指導を通して

生徒にどのような力を付けていくのか、また、美術教育を次世代の担い手である若手教員にどう繋いでいくのか。常に自問自答している。

しかし、現状は少子化に伴い、美術科の一人配置の学校が多くを占める。授業計画、テスト、評価等について、新任及び若手の美術主任は、周囲に相談すべき相手が存在しない。非力ではあるが、彼らの悩みや不安を払拭し、自信を持って授業に臨んでもらえるような研修を企画している。

2　取組の成果

(1)　教員は、研究授業の授業者を担ったり、年に１回授業を公開したりすることで、日々の授業を振り返り、自身の授業力向上に繋げることができる。中でも教科を超えて指導案を検討することは、双方にとって学びの場となる。さらに若手教員は、ミドル、ベテラン世代の教員から授業づくりのノウハウ等を学び、逆に、ベテラン教員は若手教員から ICT 機器の効果的な取り入れ方を学ぶなど、共に学び続ける研究授業や研修会となりつつある。

(2)　変化が激しく、先行き不透明で多くの課題が山積する時代を生き抜く生徒にとって、今後必要となる力をいかに身に付けさせていくのかを考えることは、私たち教員にとっても、時代を先読みし、先見の明を養うための重要な機会と言える。次期学習指導要領で、「生きる力」を育むため、全ての教科で３つの柱が示された。それらの課題追求のために、教科等指導員として様々な研修会や講演会に赴いたり、次期学習指導要領を伝達したりしたことは、非常に自分自身の学びにも繋がった。

3　課題及び今後の取組の方向

私たち教員は、日々、自身の教育実践を振り返り、授業改善に努めるのが本来あるべき姿である。目の前にいる生徒も、時代の変化と共に孤立し、メンタル面の弱さが目立つようになってきたと感じる。このような生徒たちがこれからの時代を担っていくためには、様々な力が要求される。次期学習指導要領にも「生きる力」が提示されているのには、大きな意味を感じる。

今後は、次の時代に向けて、俯瞰の目で学習指導要領を熟知していきたい。また、授業での学びが知恵となって活用できるような生徒の育成も心掛けていきたいと考える。一人一人の生徒たちが幸福な人生を送るためには、どのような力を付けていくことが必要とされているのかを常に考え、現状を踏まえた上で、研究の在り方を常に模索し、研究主任として、また、教科等指導員として有機的な研修の場をコーディネートしていく所存である。

スピーチを通した表現力の育成

OJT 研修で学びの時間を共有